

七人の助っ人

第一回 メイド喫茶篇

読書と言えば喫茶店。喫茶店と言えばメイド喫茶である。その隠れた実態を調査するべく、七人の助っ人が立ち上がった！

これは、怒濤逆巻く活字界に身一つで乗り込んだ助っ人らの壮大なる冒険譚である――

会議室では七人の助っ人が顔をつき合わせていた。

鈴木「問題はどの喫茶店にするかだ」

関口「ノパン喫茶はどうだろう」

原田「健全じゃないね」

小野「ノパンはしゃぶしゃぶに限る」

橋本「断固メイド喫茶！」

天野「読書環境適性をあえてメイド喫茶で計ることか。面白い」

松倉「よし、決定！」

鈴木と関口と松倉は和風メイド喫茶に乗り込んだ。店内は中央に畳敷、それを囲むようにカウンター、その周りにボックス席が配置されていた。かすかに流れるBGM。三人はカウンター席についた。

「座り心地はよし」

「机の高さもバッチグーです」

「狭くはないけど、足は組めないなあ」

メニューはかわいいイラスト付きである。珈琲は五百円。サービスの煎餅をつまみながら読書を開始した。

「旦那様、お嬢様」

中央の座敷に女中二人が上がった。

「これより、〇×クイズをはじめたいと思います。賞品もありますよー」

「なにかな、パンティーかな」関口がやにわにはしゃぎだす。

「亀仙人かお前は」鈴木の絶妙なツッコミが入る。

「問題。西郷隆盛像の犬は左手にいる」

「○だな」「○でしょう」「○しかないですよ」

「正解はあ、×です！」

小野は単独で入店した。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「えっ？ おおおれ？」

「メニューはこちらです、ご主人様」

「ど、どうも。じゃ、コーヒーとこれ」

「どちらでしょう？」

「あの、こ、」小野は真っ赤になった。

「小天使ケーキを」

「かしこまりましたあ♡」

小天使ケーキなるものを食べているとメイドが走り寄ってきた。小野は硬直した。

「すわっ、なにかのサービスか？」

サービスにも動揺してしまう小野である。

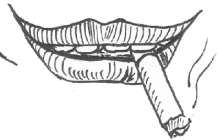
「申し訳ございません、ご主人様つ」

「え？ いや、いいですいいです」

天野慧

の

なかなか。



「新書365日」

宮崎哲弥（朝日新書）

なかなか。

「こちら小天使ケーキではなく、ふんわりケーキでした。申し訳ございません」

「え、そうなの。べつに」

「本当に申し訳ございませんでした、ご主人様」

「構わないさ。よくある間違いだよ」

小野は寛大なご主人様になった気がした。

天野は席に着くとすぐ本を開いた。そこにメイドがやってきて、おそるおそる言った。

「あの、ご主人様、メニューを……」

「お、ありがと」満面の笑みで応える天野。ほっとするメイド。

「じゃあコーヒーお願いね」微笑をた

たえたまま本に目を戻した。

イベントやゲームのあいだも天野は黙々と読み続けた。声を掛けられると本を閉じて鷹揚に応じる。見事なご主人様っぷりである。

一時間後、天野は席を立った。出際にメイドたちが「いつてらっしゃいませ、ご主人様」とお辞儀をした。

「うんうん」

ゆっくり頷いて天野は店を出た。

橋本と原田は「妹カフェ」に入った。

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

「おおっ、これですよこれ！」橋本は歓喜した。

「はいはいやって、まったく」原田はふっとため息をついた。しかし口元がほころぶのを押さえきれなかった。

「メニューになります。ご注文決まり次第お呼び下さい、お兄ちゃん」

敬語と「お兄ちゃん」は完全にミスマッチだったが、その一言は二人を虜にした。

「やっぱり妹だよな」

「なごみますね」

暖かいココアを飲みつつ、ふっと本から目上げると妹がいる。

（ああ、なんて幸せなんだろう……）

しかし、夢のような時間はすぐに過ぎ去ってしまった。

「また帰ってきてね、お兄ちゃん」

橋本と原田は密かに再帰を誓った。

会議室に七人の助っ人が戻った。

橋本「未知の世界でした」

小野「でもいいコたちだったよ」

原田「元氣が出る」

関口「和服がいいよね」

松倉「僕は読書には向かないと思う」

鈴木「帰宅するなら自分の家で十分」

天野「結論は……なかなか！」

押さえておけ



メカネは赤い合